

「古文Ⅱ」の特長と使い方

●本書のねらい

このテキストは、古文読解の基礎を身につけた高校生が、基本事項を確認しながらよりレベルの高い読解力を養うことができるように編集されています。

古文にだいたい慣れてきたな、と思っても、なかなか現代文を読むように内容をスラスラ読みとる（現代文といえども、難解な文章の内容を読みとるのは一苦労ですが）ことはできません。基本事項を身につけた後、多くの古文を読んで読解の演習をすることが、読解力向上のために不可欠です。このテキストも、いろいろなジャンルの文章を読むことにより、幅広い知識と読解力をつけることをねらいとしています。

●本書の特色

- このテキストは、「設問パターン別演習編」と「ジャンル別読解演習編」で構成されています。
- 「設問パターン別演習編」では、古文読解問題の設問をパターン別に分類し、その解法のポイントを示しています。各設問パターン別に集中的に演習をつむことができます。
- 「ジャンル別読解演習編」では、入試レベルの読解問題で総合的な読解力を養うことができます。
- 各回の「基本確認ドリル」で古文読解のための基本事項を繰り返し学習できるようにしています。

●本書の構成と使い方

設問パターン別演習編

- 例文演習……………各設問パターンの解法のポイントをとらえます。
- 基本演習……………「例文演習」の類題で、解法のポイントが理解できたかどうか確認します。
- 演習……………各設問パターンの解法を繰り返し演習して定着させます。

ジャンル別読解演習編

- ジャンル別に読解問題を集め、「設問パターン別演習編」で身につけた解法を、入試に結びつく実戦的な読解力とすするための演習をつみます。
- 基本演習……………基本レベルの演習問題です。解けなかった問題は、「設問パターン別演習編」で解法を確認しておきましょう。
- 演習……………入試レベルの実戦演習です。

《解答・解説(別冊)》……………解答例とともに、詳しい「解説」と「口語訳」がっています。

目次

設問パターン別演習編

①	主語（動作の主体）を指摘する	4
②	空欄補充問題（内容）	8
③	空欄補充問題（文法）	12
④	指示語の内容をとらえる	16
⑤	会話文を指摘する	20
⑥	敬語に関する問題	24
⑦	現代語訳（語句）	28
⑧	現代語訳（文）	32
⑨	まぎらわしい語の識別	36
⑩	主題・要旨に関する問題（1）	40
⑪	主題・要旨に関する問題（2）	44
⑫	古文の修辞法に関する問題	48

ジャンル別読解演習編

①	随筆（1）	52
②	随筆（2）	56
③	物語（1）	60
④	物語（2）	64
⑤	説話（1）	68
⑥	説話（2）	72
⑦	日記	76
⑧	紀行	80
⑨	評論（1）	84
⑩	評論（2）	88
⑪	韻文	92

設問パターン別演習編

□ 主語(動作の主体)を指摘する

例文演習 次の古文を読み、あとの問いに答えよ。

これも今は昔、比叡の山に兎ありけり。^A僧たち、宵のつれづれに、いざかもちひせんと言ひけるを、この兎、心寄せに聞きけり。さりとして、しいださん¹を待ちて寝ざらんもわろかりなると思ひて、片方に寄りて、寝たるよしにて、いでくるを待ちけるに、既にしいだしたるさまに²てひしめき合ひたり。^Bこの兎、さだめておどろかさんずらんと、待ちゐるたるに、僧の、もの申し候はん。おどろかせ給へと言ふを、うれしと思へども、ただ一度にいらへんも、待ちけるかともぞ思ふとて、いま一声呼ばれていらへんと、念じて寝たり。
〔宇治拾遺物語〕

● 語句注 ● 比叡の山——京都市の北東にある比叡山。延暦寺がある。 兎——寺院に召し使われた少年。 かもちひ——ぼたもちの類。 心寄せ——関心をもつこと。 よし——そぶり。 おどろかす——目をさまさせる。 起こす。 もの申し候はん——もしもし。 呼びかけの言葉。 いらふ——返事をする。 念ず——我慢する。

問一 ①——線部1〜6の主語(動作の主体)を文中の語で答えよ。また、②——線部A・Bの述語はどれか、それぞれ一文節で示せ。

① 1 () 2 () 3 () 4 () 5 ()
6 () ② A () B ()

問二 〰〰〰線部にはどういふ気持ちがあるか、次から適するものを選び符号を○で囲め。

ア もしも寝てしまったら食べられない。 イ 寝ていないと手伝わされる。
ウ 夜遅くまで起きていたらしかられる。 エ 食いしん坊だと思われたくない。

〔解法のポイント〕

● 主語とは、「何が——何だ」「何が——どんなだ」「何が——どうする」の「何が」にあたるものであり、問いの——線部の動作をする人(もの)である。

問一①は、一つを除くと人物が答えである。だがその動作をするのかを考えよう。

● 問二は、「ただ一度にいらへんも……呼ばれていらへん」と同じ気持ちである。一緒に考えよう。

● 主語をとらえるためのポイント

- ① 登場人物を読み取ること。この時に作者を忘れてはいけない。
- ② 登場人物は文中で別の呼び方をされる場合があるし、指示語がついて「この人」などと呼ばれることもある。それに惑わされないこと。
- ③ 敬語の使用法に注目する。

基本演習 次の古文を読み、あとの問いに答えよ。

大藏卿ばかり耳とき人はなし。まことに蚊のまつげの落つるをも聞きつけ給ひつべうこそありしか。

職の御曹司の西^{てしお}面に住みしころ、大殿の新中将^{とのあ}宿直¹にて、ものなどいひしに、そばにある人の、「この中将に扇の絵のこと言へ。」とささめけば、「いま、^Aかの君の立ち給ひなんにを。」と、いとみそかにいひ入るるを、^Bその人だにえ聞きつけで、「なにとか、なにとか。」と耳⁴かたづけ来るに、遠くゐて、「にくし。さのたまはば、今日は立たじ。」とのたまひしこそ、いかで聞きつけ給ふらんとあさましかりしか。⁶

〔枕草子「第二七五段」〕

● 語句注 ● 大藏卿——大藏省の長官。 耳とき人——耳の鋭い人。 職の御曹司——

中宮に関する事務を扱った中宮職内の部屋を、仮の中宮御所としたものをいう。 大殿

の新中将——大殿は大臣の敬称。大臣家の人で新しく近衛府の中將に任命された人。

宿直——夜間、天皇や貴人のそばに仕えて相手をする事。 なにとか、なにとか——

なんですって、なんですか。

問一——線部1～6の主語（動作の主体）はだれか。

1 () () ()

3 () () ()

5 () () ()

問二——線部A「かの君」、B「その人」とはだれか。

A () () () B () () ()

基本確認ドリル

1 例文演習の次の部分を品詞ごとに／で区切れ。

この 兎、さだめて おどろかささん ずらんと、

● 代名詞と二つの助動詞に注意。

2 例文演習の次の部分を現代語訳せよ。

待ちけるかともぞ思ふとて、

● 「もぞ」の訳し方に注意する。

3 基本演習の次の部分を現代語訳せよ。

その人だにえ聞きつけで、

● 「だに」と「え……打消」の訳し方に注意。

4 基本演習の——線部6を現代語訳せよ。

() () ()

演習1

次の古文を読み、あとの問いに答えよ。

ある君達に忍びて通ふ人やありけむ、いとうつくしき児さへ出で来
 にければ、あはれと思ひ聞こえながら、きびしき片つ方やありけむ、
 絶え間がちにてあるほどに、思ひも忘れずいみじう慕ふがうつくしう、
 時々、ある所に渡しなどするをも、『いな』なども言はでありしを、
 ほどへて立ち寄りたりしかば、いとさびしげにて、めづらしくや思ひ
 けむ、かき撫でつつ見るたりしを、え立ちとまらぬことありて出づる
 を、ならひにければ、例のいたう慕ふがあはれにおぼえて、しばし立
 ちどまりて、『さらば、いざよ』とて、かき抱きて出でけるを、いと心
 苦しげに見送りて、前なる火取りを手まさぐりにして、

こだにかくあくがれ出でば薫物のひとりやいとと思ひこがれむ
 と忍びやかに言ふを、屏風の後にて聞きて、いみじうあはれにおぼえ
 ければ、児もかへして、そのままになむ居られにし。(「堤中納言物語」)

● 語句注

● 君達——高級貴族の子息や女子。こは姫君。 片つ

方——もう一方の女。本妻をさす。 ある所に渡しなどする——
 男の自宅に連れていったりする。 いな——いけません。困りま
 す。 え立ちとまらぬこと——止まってられないこと。 な
 らひにければ——習慣になつていたので。 いざよ——さあお
 いで。 火取り——衣に香を焚きしめる香炉。 あくがれ出で
 ば——あなたを慕つて浮かれ出ていくならば。 ひとり——薫
 物の火取りと自分一人を掛けてある。

問一

この文の登場人物は、①君達・②忍びて通ふ人・③児である。
 線部1〜7の動作の主体(主語)はだれか、右の番号で記せ。

1
2
3
4
5
6
7

問二

線部1と7の「あはれ」の意味を書け。

1 ()
 7 ()

問三

線部A・Bの「ば」の違いを説明せよ。

A ()
 B ()

演習2

次の古文を読み、あとの問いに答えよ。

仁和寺にある法師、年寄るまで石清水を拝まざりければ、心憂くお
 ぼえて、あるとき思ひ立ちて、ただ一人、徒歩よりまうでけり。極楽
 寺・高良などを拝みて、かばかりと心得て帰りにけり。さて、かたへ
 の人にあひて、「年ごろ思ひつること、果たしはべりぬ。聞きしにも過
 ぎて、尊くこそおはしけれ。そも、参りたる人ごとに山へ登りしは、
 何事かありけむ。ゆかしかりしかど、神へ参るこそ本意なれと思ひて、
 山までは見ず。」とぞ言ひける。

● 語句注

仁和寺——京都市右京区にある真言宗御室派の総本山。

少しのことにも、先達はあらまほしきことなり。(「徒然草」第五二段)

7 主語（動作の主体）を指摘する

問二

① —————

② —————

③ —————

④ —————

⑤ —————

⑥ —————

⑦ —————

⑧ —————

⑨ —————

⑩ —————

⑪ —————

⑫ —————

⑬ —————

⑭ —————

⑮ —————

⑯ —————

⑰ —————

⑱ —————

⑲ —————

⑳ —————

㉑ —————

㉒ —————

㉓ —————

㉔ —————

㉕ —————

㉖ —————

㉗ —————

㉘ —————

㉙ —————

㉚ —————

㉛ —————

㉜ —————

㉝ —————

㉞ —————

㉟ —————

㊱ —————

㊲ —————

㊳ —————

㊴ —————

㊵ —————

㊶ —————

㊷ —————

㊸ —————

㊹ —————

㊺ —————

㊻ —————

㊼ —————

㊽ —————

㊾ —————

㊿ —————

線部1〜4の動作の主体（主語）を答えよ。

問一

この文で「仁和寺にある法師」は大変な失敗をした。①どのような失敗をしたのか、**語句法**を参考に具体的に述べよ。②その失敗の原因はどこにあったか、原因を示す部分を古文から抜き出して示せ。③これに対して、作者はどのような主張をしたか、自分の言葉で述べよ。

石清水——京都府綴喜郡八幡町の男山山上にある石清水八幡宮。
極楽寺・高良——男山の麓にある八幡宮付属の寺社。 しばかり
と——この程度だと。 なたへの人——傍らの人。仲間。 そ
も——それにしても。 ゆかしかりしかど——行ってみたかっ
たが。 本意——本来の目的。 先達——案内役。指導者。

演習3

次の古文を読み、あとの問いに答えよ。

① 雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子参りて、炭櫃に火おこして、物語などして集まりさぶらふに、「少納言よ、香炉峰の雪いかならむ。」と仰せらるれば、御格子あげさせて、御簾を高くあげたれば、笑はせたまふ。

〔枕草子〕第一九九段

● 語句注 ● 御格子参りて——御格子を下ろして。 炭櫃——囲

炉裏。角火鉢の説もある。 香炉峰の雪——中国の詩人白居易の

詩句に、「香炉峰の雪は簾を撥けて見る」とある。

問一

線部1〜4の動作の主体（主語）を答えよ。

① —————

② —————

③ —————

④ —————

⑤ —————

⑥ —————

⑦ —————

⑧ —————

⑨ —————

⑩ —————

⑪ —————

⑫ —————

⑬ —————

⑭ —————

⑮ —————

⑯ —————

⑰ —————

⑱ —————

⑲ —————

⑳ —————

㉑ —————

㉒ —————

㉓ —————

㉔ —————

㉕ —————

㉖ —————

㉗ —————

㉘ —————

㉙ —————

㉚ —————

㉛ —————

㉜ —————

㉝ —————

㉞ —————

㉟ —————

㊱ —————

㊲ —————

㊳ —————

㊴ —————

㊵ —————

㊶ —————

㊷ —————

㊸ —————

㊹ —————

㊺ —————

㊻ —————

㊼ —————

㊽ —————

㊾ —————

㊿ —————

高校ゼミ

古文Ⅱ

解答編

CKT

主語(動作の主体)を指摘する

(P.457)

- 例文演習 問一 ① 1 かいもちひ 2 僧たち 3 僧たち
 4 僧 5 児 6 僧たち ② A 言ひけるを B 待ちゐた
 るに 問二 E

【現代語訳】 これも今は昔のことであるが、比叡山に一人の児がいた。僧たちが、夜の手もちぶさたに、「さあ、ぼたもちを作ろう。」と言ったのを、この児は、期待して聞いた。そうかといって、作りあげるのを待って寝ないでいるのも具合悪いだろうと思って、片すみに寄って、寝たふりをして、(ぼたもちが)できあがるのを待っていたところ、もう作りあげた様子で(僧たちが)集まっただけがやがや騒いでいた。この児は、きつと起こしてください。」というのと、じつと待っていると、僧が、「もしもし。お起きください。」というのを、うれしいとは思ふものの、たった一度で返事をするのも、待っていたのかと(僧たちが)思うときまりが悪いと考えて、もう一度呼ばれて返事をしようと、我慢して寝ていた。

基本演習

- 問一 1 作者(清少納言) 2 そばにある人 3 作者
 4 そばにある人 5 大藏卿 6 作者 問二 A 大藏卿
 B そばにある人

【現代語訳】 大藏卿ぐらい耳の鋭い人はいない。本当に蚊のまつげの落ちるのも聞きつけなさるほどであった。

職の御曹司の西面に(私が)住んでいたころ、大臣家の新中将様が宿直で、(私が)話などしていたところ、そばにいる女房が、「この中将様に扇の絵のことを言いなさい。」とささやくので、「すぐに、あのお方がきくと(席を)お立ちになるでしょうから(それから)ね」と、とてもひそかに伝えるのを、その当人さえ聞きとれずに、「なんなの、なんですか。」と耳を傾けてくるのに、(大藏卿は)遠くに座っていて、「しゃくにさわる。そうおっしゃるなら、今日は(席を)立つまい。」とおっしゃった、どのようにして聞きつけなさるのだろうかと驚きあきれたことだった。

〈解説〉登場人物は作者・そばにある人・大藏卿。新中将は名は出るが動作に関係ない。文中で大藏卿が「かの君」、そばにある人が「その人」と言い換えら

れているが、この人物がつかめれば、この基本演習はやさしいはずである。

基本確認ドリル

- 1 この／＼児／＼さだめて／おどろかさ／んず／らん／と、
 2 待っていたのかと思うと考えると、 3 その人でさえ聞きつけ
 ることができないで、 4 驚きあきれたことだった。

(注) 2の連語「もぞ」は、悪い事態を予測し、そうなるとは困るといふ危惧、心配を表す。3の「え……打消」は、あいだに入った動作を不可能とする働きがある。

演習1

- 問一 1 ② 2 ③ 3 ① 4 ③ 5 ②
 6 ① 7 ② 問二 1 いとしい。かわい。 7 かわいそう
 だ。気の毒だ。(注) 7の意味は、しみじみと心打たれる・感動する、でもよい。 問三 A 「已然形十ば」で、順接の確定条件を表す用法。

B 「未然形十ば」で、順接の仮定条件を表す用法。

【現代語訳】 ある姫君に人目を忍んで通う男がいたのだろう、たいそうかわいらしい子供までできたので、(男は)姫君を「いとしいと思ひ申しあげるもの、やかましい本妻がいたのだろうか、(訪れは)途絶えがちでいるうちに、(子供は)父親を忘れずたいそう慕ってくるのがかわいらしくて、時々は、住んでいる所に連れて行ったりするのを、(姫君は)「困ります」などとも言わないでいたのだが、しばらく間を置いて男が姫君の所へ立ち寄ったところ、(子供が)たいそう寂しそうにしていて、(父を)珍しいと思ったのだろうか、(慕ってくる。男は)頭を撫でながらじつと見ていたが、とどまることのできない用事があって出て行くのを、(子供は)習慣になつていたので、いつものようにひどくあとを追う、それがかわいそうに思われて、しばらくそこに立ちどまって、「それでは、さあ」といって、抱き上げて出たのを、(姫君は)たいへんつらそうに見送って、前にある火取りをいじりながら、

子供までがこんなにあなを慕ってそわそわして出て行くのならば、
 香を薫た火取りではないが、私は一人ですますあなたを思いこがれることでしょう。

と男に聞かせるともなく言うのを、屏風びょうぶの後で聞いて、(男は)とても気の毒だと思ったので、子供も(姫君に)返して、そのまま(その家に)自然と

どまったのだ。

〔解説〕 問一 登場人物が示されているので、前後の文脈の流れを正しく追えば主語はつかめる。むずかしいのは問いにない「めづらしくや思ひけむ、かき撫でつつ見たりし」の続き具合だけである。この部分は「現代語訳」参照。
問三 基礎的文法事項である。仮定・確定、順接・逆接は訳すときに常に意識していこう。

〔演習2〕 問一 ① 石清水八幡宮を拝みに行き、付属の寺社を八幡宮そのものと思ひ込み、肝心の本社に参詣しなかつた失敗。 ② あるとき思ひ立ちて、ただ一人、徒歩よりまうでけり。 ③ どんなことにも、指導者はありたいものだ。 問二 1 石清水八幡宮(の規模) 2 仁和寺にある法師 3 石清水八幡宮 4 何事

〔現代語訳〕 仁和寺にいた法師が、年を取るまで石清水八幡宮を拝まなかつたので、情けなく思つて、ある時思ひ立って、たった一人でお参りした。(そして末社の)極楽寺や高良神社などを拝んで、(石清水八幡宮とは)これだけのものと合点して帰つて来た。そして、同僚に向かつて、「長年思つていたことを果たしました。(話に)聞いていた以上に、石清水八幡宮は尊くいらつしました。それにしても、お参りに来た人みなが山に登つたのは、(山の上に)どんなことがあつたのだろうか。行つてみたかつたが、神様にお参りするのが目的だと思つて、山(の上)までは見なかつた。」と言つた。

少しのことにも、案内者はありたいものである。

〔解説〕 問一 ①は、「極楽寺・高良などを拝みて、かばかりと心得て」と「山までは見ず」でつかむ。②急に思い立ち、連れも供もいなくなつたからである。③「徒然草」では、作者の主張や主題は、文頭か文末に多く書かれている。これを知つておきたい。 問二 主語は人物とは限らないことに注意。

〔演習3〕 問一 1 中宮定子(少納言が仕えている人) 2 「集まりさぶらふ」人の一人(少納言の同輩の女房) 3 作者(清少納言・少納言)

4 中宮定子

〔現代語訳〕 雪がとても高く降り積もつた日、いつもと違って(部屋の)格子を下ろして、囲炉裏に火をおこして、(私たち女房が)話などしながら集ま

て控えていた時、「少納言よ、香炉峰の雪はどんなだろう。」と(中宮様が)おっしゃるので、御格子を(同僚の女房に)上げさせて、(私が)御簾を高く捲き上げたところ、(中宮様は)にっこりとお笑いになる。

〔解説〕 登場人物がつかめればすぐ理解できる。「枕草子」とあれば、まず作者清少納言を思い出そう。次に、二重敬語が地の文にあれば「仰せらるれ」せたまふ)、主語は中宮定子と考えよう。中宮でなければ天皇と思えばよい。2は、「あげさせ」の「させ」が使役であり、作者がだれかにさせたことを知る。そうすれば「集まりさぶらふ」人の一人だとわかるだろう。

設問パターン別演習

空欄補充問題(内容) (P. 85~11)

例文演習

- (1) ウ (2) ケ (3) エ (4) オ (5) イ (6) コ
(7) ク (8) カ (9) キ (10) ア

〔現代語訳〕

(1) 腹立たしいもの、急用のある折に訪ねて来て長話をする客。
(2) 興ざめるもの、昼ほえる犬、……火をおこしていない囲炉裏。

(3) めつたにないもの、舅しゅうとに褒められる婿。また姑しゅうとめによく思われるお嫁さん。
(4) にがにがしいもの、教養のある人の前で、教養のない人が、

もの知り顔の声で人の名などを言ったこと。 (5) 所在なきの慰むもの、若・双六・物語。 (6) 胸がどきどきとするもの、親などが気分が悪いと

いって、ふだんと違った様子であること。 (7) かわいらしいもの、瓜に描いた幼児の顔。雀の子がちゅうちゅう鳴くとびよんぴんとやつて来ること。 (8) じれつたいもの、急ぎのものを縫う時に、薄暗い中で針

に糸を通すこと。 (9) 気がかりなもの、十二年間の山(比叡山)ごもりをする法師の母親。 (10) 優雅なもの、ほっそりとして美しい貴族の若者の直衣姿。

基本演習

- 問一 ① オ ② キ ③ ア ④ カ ⑤ イ
⑥ エ ⑦ ア ⑧ ウ 問二 人とすみか

〔現代語訳〕 流れゆく川の流れば絶えないで、しかももとの水ではない。淀みに浮かぶ水の泡は、一方で消える一方でまたできて、(だが)長く消えないでいる例はない。世の中に生きている人とその住みかまた川の流れや